暮らしのぞき箱

季節を知ったら
暮らしが楽しくなった

〜第一九七号〜

雨水（うすい）　二月十九日

安永の餅

赤福本店隣の五十鈴蔵で開かれている「餅街道ものがたり展」。二階では東海道四十二番目の桑名宿の絵図が展示されています。

お伊勢参りの旅人にとって桑名といえば、焼きハマグリが知られており、旅日記にもよく書かれています。しかし、ここにも名物の餅があったのです。

東海道は七里の渡しを経て桑名城下を行くと、安永の町並みを抜けて、町屋川に出ます。この川は、一般には員弁川と呼ばれますが、このあたりではもっぱら町屋川と呼びならわされています。展示では一八〇二年発行の『久波奈名所図会』の町屋橋の周辺がクローズアップされています。

町屋橋は川の中洲を利用した木橋で、中ほどには馬を待避させる張り出しがあります。橋のたもとの安永の街道沿いに家が建ち並び、中洲にも茶店とおぼしきものがあります。旅人がそこで憩っています。今も名物として知られる桑名の安永餅は、このあたりで売られていたので、安永の餅から安永餅の名称になったのではないかと考えられます。

今は、その町屋橋ではなく、昭和に架け替えられた国道一号の鉄筋の橋で、多くの往来があります。けれど、旧街道沿いの橋のたもとには立派な「伊勢両宮常夜燈」が立っていました。一八一八年に桑名や岐阜の材木商らによって寄進されたものです。その台座には、木の板をはめたような窪みが三ヶ所縦にすっと刻まれていました。かつては街道の両側にこうした台座があり、川の水量が多いときなどはそこに木の板をはめ込み、通行止めにしたのではないでしょうか。足止めされた旅人の困った声まで聞こえてきそうな気がしました。そんなとき、旅人を和ませたのもまた安永の餅だったのでしょう。

文　千種清美

伊勢内宮前
おかげ横丁